

世界舞踊映画

会議に出席して

市川 雅

1981年6月15日～20日までリンカン・センター・ニューヨーク公共図書館で世界舞踊映画会議 (International Dance Film and Videotape Festival and Conference) が開かれた。主催はリンカーン・センターのダンス・コレクション(室長:オスワルド・ジュネヴィーブ)とユネスコに付属する世界舞踊協会 (Conseil International de La Danse) であった。世界舞踊協会は1974年に発足し、委員長はストックホルム舞踊博物館のベント・ヘーガーで、この世界舞踊映画会議が終了した後、手紙を呉れて、日本側の協力を感じ、出品した笠井毅の「伝授の門」をストックホルムの博物館で購入したいといってきた。今迄、C I D D で主催したプログラムは次のようなものであった。

- 1975, スtockホルム 世界舞踊映画フェスティバル
- 1976, ニューデリー インド古典舞踊フェスティバル
- 1977, イタリア 世界民族舞踊会議
- 1978, ボンベイ, マドラス インド古典舞踊フェスティバル
- 1978, ニューヨーク 世界振付師会議
- 1980, ロンドン 舞踊家の地位についての世界会議

アメリカ合衆国の世界舞踊協会ブランチは1978年に設立され、ジョネヴィーブが中心になって、次のようなプログラムを開催した。

- 1978, 世界振付師会議
- 1980, アメリカ舞踊に関する会議
- 1980～81, 身体障害者にたいする舞踊療法についての会議

この一連の会議のほかはさまざまなメディア、映像、記譜法などを使用して、作品を保存し、一般の人々に舞踊についてのよりよい理解をってもらうこと、振付権の保護と法律の整備、世界の舞踊コレクションの充実、舞踊教育の拡張、各国間での舞踊情報の交換、舞踊関係者の生活の向上などを目ざしている。

今日の舞踊映画会議の特徴をいくつか拾ってみよう。リンカーン・センターにある図書館の5ヶ所で映画やビデオが映写され12時から5時まで通して毎日上映した。合計125時間であった。ただ、日時に5ヶ所で私達は見る事ができないのだから、

いくら頑張っても25時間しか見られないわけで、全体の80%を見逃したことになる。

一番大きな会場、ブルノ・ワルター講堂で映写された作品をここに列挙してみよう。

月曜日 「ゴールドベルグ変奏曲」(ジェローム・ロビンス)。「バレエ・ランバートの50年」「舞踊を創作する」(ルチンダ・チャイルド, デビッド・ゴードン, メレデス・モンク他)。

火曜日 「バリ及びセレベスの舞踊」「白鳥の湖」(ヌレエフ振付)。「若者と死」(ローラン・プチ振付)。「ライト・パート5」(武井慧)。「ミュージカル・コメディ・ダンス場面集」(ロビンスのウェスト・サイド物語など)

水曜日 「真夏の夜の夢」(バランシン振付)。「空間都市」(ケネス・キング振付)。「カンボジア宮廷舞踊」。「ニジンスキー頌」。「ロイヤルバレエ」。

木曜日 「松本幸四郎」。「黒川能」。「ナタリア・マカロワ」。「バリ島のレゴン」。「ジゼル」(ブレア, フラッチ)。

金曜日 「エジプト舞踊」。「アポロン」(バランシン振付)。「月に憑かれたピエロ」(グレン・テトリー)。「トルス」(マース・カニングハム振付)。

土曜日は「映像と舞踊」という題で会議が開かれ、パネリストとしてジェローム・ロビンス、エドワード・ヴィレラなどが参加した。

驚いたのは、イギリスのBBCやアメリカのPBSなどで放映されたテレビ番組が公開されていたことだ。1979年にBBCで作られた「ディアグレフ・ポートレート」はドーリン、マルコワ、ストラビンスキー夫人、バランシン、ダニロワ、リエッティ、死ぬ直前のマシーンなどにインタビューした1時間15分の番組であるが、今回公開されただけでなく、私達が手に入れようとすれば手に入れられることを知った。日本の場合、NHKで収録したものなどは破棄されているようで公開されたり見られたりする事が版權の問題があって出来ないのが現状である。

日本からは私が数本の映画をもって行き、本田安次先生が大元神楽のビデオを寄贈し、それぞれ上映されたようだ。私がビデオを持っていかなかったのは、きちんと編集されたものがなかったことによる。映画に関していえば、日本にはモダン・ダンス、バレエの映画がまったくなく、モダン・ダンス、バレエの人達は自分の作品を海外で紹介する気がまるでないのではないかと思ってしまった。

近い将来、ユネスコなどと協力して、こうした舞踊映画フェスティバルを日本で開くとともに、国際的な舞踊学会を日本で開き、日本の舞踊学者の実力を世界に知らしめたいものである。